
異能学生 2 年生

LastWord

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異能学生2年生

【Nコード】

N4755M

【作者名】

Last Word

【あらすじ】

多分、普通でちょっと不良な高校生：天晶琉恩。学校には親友と呼べるほどの友達もおらず、今日もまた、一人で時間を潰して、適当に帰る……。しかし、その日はどうやらトラブルが……。一つのトラブルは惰性で続いていた日常を終わらせるピリオドとなり、彼を新しい世界へと導く……！！……って、別に異世界召喚とかされるわけじゃないんだけどね。現代世界で、異能に目覚めた主人公たちの物語を書いていければ、と思います。

基本的に、ほのぼのしたいところです。今のところはしてない…の

かなあ？

ちゃんと小説を書き始めるのは初めてですので……少しづつ、レベルアップして行きたいところでもあります。

第一話 ただの不良と思ったら…

「……………」

誰も居なくなった教室に一人、手元の携帯を俯いてじっと見つめていた。

携帯の画面では、もぐらが出てきては対応するボタンを押されて叩かれる…というのを繰り返し映像が流れていた。恐ろしいほどに素早い指捌きでボタンを押し捲くる俺。今ならきつと、メールマスター的な女子高生にも引けを取らない。…はず。

と、言っても自分はメールが素早く打てるワケでもなかった。

どちらかと言えば遅い。メールを送る対象がないから、経験値がとてつもなく低いんだ。

そんな具合に、携帯の画面を見続けていたが。そろそろ、辺りが暗くなってきた。

視界を広く持ってみれば、暗い中での携帯からの光は、目に悪そうだった。

「んー……………帰るか。」

季節は春。

桜も咲き誇り、何事か…………よく、わからないけれど、何かが始まりそう。

そんな気になるこの季節。

そんな中、何故に自分は一人で携帯あぶりなんぞ弄って時間つぶしているかと言われれば…………

友達の輪に入るの、失敗したんだ。

現在二年生。一年からの友達は…まあ、普通に話す事はあっても、友情を感じる事は無かった。

いや、自分の友情とみなす好感度が高いわけではなく…なんか、席の近い人と用事を話して、用事が終わればはい、終わり……みたいなの？ そんな関係。

二年生ともなれば、クラス替えもあり、友達と違うクラスになってしまったあー！ なんて嘆いたり、その逆で喜んだりするものだろうけど。俺は何の感動も無く二年生になってしまった。

どうやら、一人でいるのを見かねた親切キャラが友人を芋づる的に引張ってくるイベントも、用意されていないようだ。……ああいう無口系主人公の優遇されっぷりは異常だと思う。

「ま、一人でもこまらネエよ……。」

少しばかり、悪ぶった言動。

自分の外見に、よく似合ってるかと思う。

目つきは鋭く髪はぼさつと気味。まあ、超覇眼目に見て、整っていると言えなくも無い。はず。鏡を睨み付けたことのある人なら分かるだろう。どうにかじーっと見つめて、自分の顔がかっこいいと思いたくなるものなのだ。

廊下を歩く。そして下駄箱に着く。

部活に精を出している生徒達も、もう帰ったのだろうか。

特に誰にも出会わない。特に誰ともすれ合わない。

すれ違ったら「さようなら」と挨拶をして少しだけ好感度を上げようかと思っていた俺をどうしてくれる。

……？ 一人でも困らない……？

何を言ってるんだ。人間、一人じゃ生きていけないんだぜ？

……と、そんなこんなで自分の頭の中で自分に向けて言い訳をしていた。

別に誰かに見られてるってワケでもネエのにね。……え？

「ちよと……はなし……!!」

「いいじゃネエかよ。俺はお前が気に入ったつつつてンだろが!!」

思考に埋まっててあまり聞こえちゃいなかったが。

もう一人の自分的存在とあれやこれやと会話していると、どこからか声が聞こえてきた。

気付いていなかったの、大分近づいてから気付く、というコトになっちゃったようで。

「……………」

と、言うか。なんだ。

この学校のレベル的に、こういうクズが混じっていてもおかしくないと思う。

まあ、レベル的にはそんな、不良がいるかないか微妙なところである。

要は、入ってから勉強についていけたか、がんばれなかったのか、といったところ。

ともかく、目の前では数人の男子生徒が、女の子に群がっている、という状況が広がっていた。

女の子を観察する。ロングの黒髪に、気弱そうな目。ほっそりとした身体の割に胸が結構盛り上がり……：いかんいかん、服を着てるってのに、注視してしまった。ああ、そうだよ。おっぱい大好きだよ……！！

男は……まあ、典型的なチャラで下卑たほえみを浮かべた不良だった。

リーゼントもモヒカンもしていないところを見れば、本当に只の始末に終えないカスだ。

まあ、つまり……これはネタでやってるキャラではなく、素でやってる奴らなのである。

「……おい。」

気がついたら、口が開いていた。

だって、こんな細腕な女の子が、こんな涙を眼に溜めて、絶望的な表情をしているんだ。

喧嘩にゃあまり自信がネエけど……俺をサクリファイスしてこの女の子が助かるってー言うなら俺は大歓迎だ……！！

ゴツツツ……！！！！

先手必勝……！！ 声をかけたにも関わらず、返事を聞く前に殴り倒す。靴で。

教科書の入った靴はダテじゃない……！！

「つてつめっ何をしゃガッツッ！！！！！！」

鞆をめちゃくちやに振り回し、ロング少女を捕らえていた不良にヒット！！

ナンド。こいつ、デブってだけで実は大したコトないのな！！　ざまあ！！！！

「え……あ………」

「今日は、靴は諦めろ。俺も諦める。」

だが流石に全員を完膚なきまでに叩きのめして離脱！！　なんて自分には無理である。

きつつい眼のせいでよく喧嘩をふっかけられることはあるが、勝率は……まあ、イマイチなんで。

多勢に無勢が殆どの理由ではあるんだけど、それは今回も状況、同じだから。やっぱり勝率的に心配なんだ。

今のはただ、奇襲が上手く行ったからなんとか攻撃が通ったに過ぎない。

俺は少女の手を取り、無理にでも引張った。上履きのままだけど、仕方が無い。

少女は引き摺られるように走り出したが、俺の意図をなんとか理解すると、少しづつ、しっかりと走り出した様子が自分の手を通じて伝わってきた。

ついでに、後方からどたと走る音も伝わってくる。……仕方ないな。鞆打ちつけただけじゃー、復活も早いかな……！！

道を曲がってまっすぐ走ってそんでもって路地裏に入ったかと思えば大通りに出て……

ずんずんと、人通りの多い場所へと少女の手を取りながら走る走る。人通り程度何とも思っていないのか。後方からは戸惑う通行人と罵声と足音がまだ、聞こえていた。

こうなったら……!!

頭の中で進路を決定する。回り込んで通せんぼ、なんて戦略を取らないアホどもで良かった……!!

町の中を全速力で走りこむ。今思えば、全速力で先生の居る職員室に駆け込めばさっさと目標達成だった気が、しないでもない……が、後悔しても仕方がないもの、ってあるよね!!

「つとツツ!! チツ、まじい!!」

「やっべ……!!」

俺の進路に気が付いた不良共が、次々に引き返して行く。

自分の目の前にあったのは交番だった。

餅は餅屋。この世のルールに合わない人は、専門職の方に排除していただきましょう。

後方を見る。もう誰も追って来て居なかった。

まだ追うつもりであれば、交番の人達に仕事してもらおうかと思っていたけど、それらも必要無さそうだ。

「ふう……ふう……はあ……はあ……」

「はあ、はあ、はあ、」

どちらからともなく、減速して交番の前で足を止めた。
部活なんて入ってないので、こんなに走るのは久しぶりだ。しかも
追われて走るなんていうのは。

暫く、お互いに声も出なかった。別に少女の息遣いに聞き入って
たわけではない。断じてない。

……。

こんだけ美少女なんだよ？

こう…はあはあ言ってるのを聞いて、想像を掻き立てられるのが高
校生じゃん…？

まあ、なんていうか。オカズは決まった。

「……あ、の……？」

「いや、その、オカズっていうのはそういうコトでは…!!」
「…………？」

自爆した。しかしまだ大丈夫そうだ。なんのこと…？ と言いたげ
に首をかしげている。

「あの…もしかして、天晶あまあき 琉恩るおん…君…？」
「えっ…………？」

自爆した後処理をどうしようか…と、少しばかり真剣に考えていた
ところ。

自分の名を呼ばれて、はっ、と、顔を上げた。

そう、これが自分の名前。ちょっと変わっているけど、そんなに苛められる名前でもないし。

そんな気にしていないモンである。変わった名前、っていうことは、親がしっかりと考えてくれた、っていう証だと思うし。

「あ……違いました…か…?」

「いやいやいや、大丈夫。その名前で合ってる。」

ちょっとこんな美少女が名前を覚えていてくれて感動して思考に埋もれてしまった。

うん、不良なんか追いかけられたりしたけど、けっこう今日はいい日だな!!

「良かった……いつも、一人でご飯食べてた人…です、よ…ね？」

見た目とは違ってけっこー、優しい……?」

「み、見た目とは違って、て……。」

あはは……と、顔を引きつらせながら軽く笑う。笑うしかない。

一般人の人が見れば、間違いなく怖い人の部類に入るんだ。俺は。その目つきの怖いヤツが、授業中はしっかりと教科書を開きノートを取っている。

そんな光景を二年に上がってから数日間、クラスメイトに見せ続けているので、もうそろそろみんな、俺への評価を書き換えてもいいと思う。

まあ、つまりは。何も言わなければ不良にしか見えない。そんな男なんだ。

「あ、その、ごめんなさい……。助けてもらったのに、こんなことを……。」

「いいよ、事実なんだからよ。」

実際、そこまで傷付いてはいない。
女の子と話しているんだ。

ちよっとした目的だった、対人会話を女の子としているんだ。
嬉しさが怒涛のように流れ込んできて落ち込む暇なんざありはしない……！！！！

「私、同じクラスの光原 みつはら ちかげ 千景って言って……」

「んん……？ ああ、同じクラスだったんだ。まあ、何かの縁だから。よろしくな。」

折角の友達候補。今日が終わったら何も無かった事に……というのは寂しい。寂しすぎる。

今から、明日学校に行ったら挨拶する、と、決心した。

今の会話のノリから、自然と右手を握手の形で出すコトが出来た。

自分から話しかけたりスキンシップしたりするのが大の苦手なこの俺が！

二年生になっていきなり成長したなあ……と、感慨深げに心の中で何度も頷いた。

釣り橋効果、っていうヤツで、引っ込み思案が麻痺った可能性もある。

さて……少女の反応だが……

あ、ちよっと「えっ……？」って顔をされた。

あ、それからちよっと笑って手を差し出してくれた。

ああ、なんていうか……女子ってこんなにもかわいいモンなの？！

なんとなくざらーっとしか見てなかったから、他の女の子も、今度からしっかり見るコトにしよう。

それでもって、手が合わさって恐る恐る手を握ろうとすると……千景ちゃんが凄く驚いた眼でこちらを見ていた。

なんだ…？ まさか、俺の手がぬめぬめしてて気持ち悪そうだったとか……！！！！ は、多分無いと思っていたんだけど……

いや、待った！ コレは……俺の背後を見て固まってる眼……！？

「え………」

千景ちゃんがそんな眼をしているのにもかかわらず、俺は危機感も持たず「なんだろう？」と言った調子で後ろを振り向いた。

直後、脇腹を黒い何かが突き抜けた。

一瞬、痛みは無かった。しかし徐々に、自分の腹部が異物を飲み込んだのだという感触と、穴の開いた脇腹から溢れる、おびただしい血に、うずくまる。

さっきまで千景ちゃんの手を握ろうとしていた掌は、咄嗟に自分の脇腹へと当てられた。

ザシュツツツ

黒い刃が引き抜かれる感覚。勢い良く飛び散る血液。

「きゃ……あああああああ……！！！！！！」

千景ちゃんの手切り声に、自分でもこんなナイトの心得なんてあったのか、と思うほどにしつかりと。

刃の向かってきた方向から、通せんぼするように手を広げた。

「逃げて!!」と、声を上げる前に。俺は信じられないものを目に
して言葉を失った。

そこには、全身からオーラのように闇を放出しながら…

今しがた俺を貫いたと思われる影の刃を手を翳して操っている……

さっき、殴った不良のデブが居たんだ。

第二話 異能覚醒

異能…というのを現代にあると言われれば、どうだろうか。

確実に、そういうものがあると言われれば。人はおおよそ、「中二病乙www」なんて反応が大小なりとも帰ってくる。

ソレが普通。ソレが、俺の居る世界である。

しかしながら、大部分の人の知らないところで…異能、と呼ばれる力は確かに存在する。

そういうのを自分が知っているのは、自分の家族が異能を持って生まれる家系らしい、という理由からだった。

一人一人に必ず存在し、その本人の心の強さや、魔力的なモノのキヤパシティにより、異能が使えるかどうかが決定される。

人により最初から持つ属性は決まっており、アイテムや修行などにより新たな属性を追加する事も可能。

この属性…と言うのは、オーソドックスな火や水、風、土なんかもあるし、かなり特殊な属性も存在する。まあ、ソレは実際に目にした時になれば、分かる事だ。

自分のウチの家族は、父母姉全員、二つの属性を持つ…と言う、異能を持って生まれる家系…という事実に恥じない属性の多さだ。

ただ…俺は、今までどう頑張っても異能が目覚めることが無かった。

ある方法で調べてみた事によれば、魔力は限りなく多いらしい。

…が、しかし。どう頑張っても力が発動するコトが無かった。

一応、それなりに「異能」っていうのがあるのなら使ってみたいか

ら。

頑張ってはみたものの、何も出ない。自分の属性も分からない。実際、こんな異能なんか、無くても生きていけるしな。現代って。特技欄にイオナズン、なんて書きたくないしさ。

……しかし。

「あーっひゃっはっはっはっは！！！！ ナニが起きたかとも不思議って顔してンなあ！！」

醜く息を撒き散らしながら。醜い笑い声を撒き散らす。翳した手の先でくねる影の刃。

…間違いない。間違はなく、これは異能。

オーソドックスな闇の異能なのか、影の異能なのか。実のところ、オーソドックスな闇の異能の方が応用が利いて敵となるこちらとしてはかなり不利である。

闇の異能の中に影も含まれてる、という認識で間違いない。

「ほうらよお！！ もういつちよおー！！！！」

地面を這う影が盛り上がり、黒い爪となって襲い掛かる。

見える。だが、避ける事など出来ない。後ろには千景ちゃんが居る。こいつはちゃんとそれを考えて影を投げてきているのだろうか。

……ないな。

影を腕で受け止めた。腕を貫通し、影が制服を貫く光景が見える。ここで幸運なのは、自分にターゲッティングが固定されているところだ。

後ろの彼女が目的であれば、異能に何ら対処できない俺をすり抜けて彼女を攫う可能性は否定できない。

この肉の塊（不良デブ）は、恐らく自分を徹底的に痛めつけた後に、悠々と千景ちゃんを攫っていいこうと思っているのだろう。

「あ、天晶君……！！！」

後ろから千景ちゃんの声が聞こえる。早く逃げてもらわないと困るんだけど……

しかし、警察は何をしているんだ……！！

「は、は、はやく、逃げ……！！！」

自分の腕に影が突き刺さることにより、影と影が繋がった。

影の異能は、影が繋がることにより、自分の影として操ることが可能……と、聞いた。

……影は自分の背後。自分の背後の影は千景ちゃんの影と重なっている。

……ここまで悪運が重なるってどういうことなんだよ！！！！

自分の影から、無数の刃が頭を出した。

自分は腕を影刃に貫かれて動きを制限されている。その上、脇腹をざっくりと貫かれている、ときたもんだ。

これだけ影に固執すると言うことは……間違はなく、このデブの異能は影……！！

「つか……っは……あッッ！！！！」

影から覗いた刃の群れは、まるで剣山のように。その刃一つ一つが自分の足を貫き、全身を貫通し、沢山の自分の部位が切り裂かれた。引き抜かれた瞬間、自分は出血死しそうだ。こんな無造作に斬り付けられているのだから、恐らく……大事な血管も構わず切断されているのだろう。

不良の癖にココまでやるとは……外見的に上に立てるような身体能力を持っているワケでもなさそうなので、恐らくコレを使って他の不良共を脅し、従わせてきたんだろう。影から刃を出せる、という技だけで、もう喧嘩なんか有利を通り越してチートな立ち位置になれるモンだろうから。

頭がボーっとする。

貧血によって世界が白く白く染め上がる。

「あ、あま、あ……」

後ろから、千景ちゃんの声が聞こえる。知り合ったばかりの思い出がコレって……どうなのさ、って感じた。

自分から、何かが抜けて行くのを感じた。

黒い刃と、自分の血だろう。

立っていられずに、自分はその場に倒れこんだ……と、思う。

全身を貫かれて、痛くて痛くて感覚が正しく認識されていない状態なんだ。

「あ……ま、あ……いやあああああああああ！！！！！！」

多分、残った感覚を総動員させてしっかりと感じた身によれば……

自分は、千景ちゃんに優しく抱かかれ、大声で泣かれたと思う。

その時、光が辺りを眩しく照らしたような…気がしたけれど。

アレは天からの使いが来たとか、そういうことなんだろうか……。

「あ……ま、あ………いやあああああああああ……！！！！」

自分の叫び声に、自分でも驚いていました。

目の前には信じられないような光景。

影に、影から伸びた刃に、人が貫かれている光景。

不良に絡まれている私を、勇気を持って助けてくれた。一緒にここまで走ってきた。その彼が。

影の刃を引き抜かれて、崩れ落ちる天晶君を、慌てて抱きとめる。信じられない…けど、天晶君が大変な状態であるのは事実。

制服に血がたくさん付いたけど、構ってられない。だけど、混乱して涙が止まりませんでした。

私は臆病で、いざとなれば何も出来ない子。
ただただ、泣いているだけしか出来ない子。

だけど、彼を守りたいと思う。彼を傷つけて欲しくないと思う。
眼前に一つ。影の刃が頭をもたげて……影の向く先は……心臓……
?!

目の前の不良は、喧嘩の加減を知らないみたいでした。
いえ、自分を害した者は殺しても差し支えないと本気で思っている
のかもしれない。

私が盾になれば、一回くらいは防げるはず……だけど。二回目はど
うしよう……?

そのまま彼に覆い被さって助けが来るまで待つ……?

「ンじゃ、ま、さようならあああああ!!!!!!」

にたにた、と、虐げられる者を甚振り楽しむような目を向けて。デ
ブさんは刃を天晶君に向けられ——!!

「いやあああああああああああ!!!!!!」

私は叫ぶ。彼を抱かかえ、そんなのは嫌だ、って喚くしかなくて。

その瞬間。身体の内側が熱くなるような感覚が広がりました。

自分の内側が燃えているような、そんな感覚。

自分の中に新たに力の燃える源が、突如現れたかのような。

目を閉じれば、自分の中心に眩いまでの光が集まってきているよう
な。そんな感覚。

ぎゅっ、と、天晶君にしがみつきながら、その衝撃を待って……

しかし、来るか来るかと身構えていた影の刃は、一向に襲い掛か
ってきません。

私は少しだけ目を開ける。

「……………!?!」

これは……………?!

自分を中心に、光が溢れて……………いる……………?

自分自身が、眩い光となってそこに存在していたのです。

「っチィ!!!! お前も俺と同じようなヤツか……………!!!!!!」

何度も、影に襲わせようとしているものの、光の中に影は存在でき
ない、という物理法則は正しく反応するみたい。考えてみれば、影
が人に危害を加えるために刃になる、って……………とてつもなく、非、
現実的ですけど。このときは、天晶君が大変な事になっていて、混
乱に乗じて受け入れてました。

「ケッ……………まあいい……………っどーせソイツはもう死んだだろうからな
!!!! っハッ!!!! ざまーみやがれ!!!! ひゃーっはっはっは!!
!!!!」

……………!!!!!!

そ、そうだった!! 天晶君!!

私は天晶君の様子を見た。専門の知識、なんて持ち合わせていない
けれど、動脈等斬っちゃいけない血管があることくらいは知ってい
ます。

出血量からして助からない……………かもしれない。

「お願い……!! 治って……!!!!!!」

今日、やっと友達になれた人。

今日、親切にも困ってるところを助けてくれた人。

その人を、こんなつまらない事で殺してしまうのは、とても自分は許せん……!!

光が彼に吸い込まれて行く。

止血までは行かないけれど。止血よりも、祈り続けるコトが重要だと、私は何故か思ったのです。

「き、君、どうしたのかね!!」

光を天晶君に与えながら、顔を上げた。

警官だ。交番を短い時間、開けていたのでしょうか。

……この警官が交番を開けてさえいなければ、こんな怪我をすることは無かったのに……!!

「すいません。救急車をお願いします。クラスメイトの……いえ、友達が怪我を……。」

だけど。この人を責めていても天晶君は助かりません。

元が引っ込み思案とは思えないほどに冷静に、私は警官に救急車の手配をお願いした。

第三話 別れ

「……………」

慣れない枕に耳元を掻き、不快な顔をして目を覚ます。

慣れない枕……ということは、自分は多分、寝てたんだろうと思う。しかもウチではない、どこか他の場所で……だ。

「……知らない天井だ。」

これは最近、あるロボアニメのセリフだと知った。詳しくないんだ。

「……………んー……………」

眉を潜め、自分の状況を分析する。

自分は寝る前に何をしていたか。今現在はどういう状況になっているのか……………など。

「まずは……状況をよく見て把あk……………!?!?」

まずは自分のベッドを……と、視線を落とすと……………そこにはサラサラな黒い髪が広がっていた。

ちなみに周囲は真っ暗だ。ホラーゲームの1シーンを見たような感覚で、息が「ひい?!」と止まった。

「い……いや、ナンだ……………女の子か……………」

髪、首、胴……………と、視線を落としていけば。何のコトは無い。女の子が自分のベッドに突っ伏して眠っているだけだった。

男子女子の見分けは、髪長さもあるし、ウチの高校の制服を着ている、ということもある。

ウチの高校は、男子は紺の学ラン、女子は紺に白襟のセーラー服…という、かなりノーマルなものである。

逆にシンプルでかわいい、という意見から、人気が無いことも無い。まあ、男が制服で高校を選ぶ、なんてことはあまり無いだろうから、しっかりと考えた事ってーいうのはあんまり無いんだけど。

「…って！ いや、そうだとでも何故に！？」

自分は、はっきり言ってヒロインに看病されながら眠るなんてイベントの起こしような無い生き方をしていたと断言できる…と、思う。だって二年にもなって部活も、強制的に入れられたトコはずっとサボり通しているし。

女の子と積極的に会話したり幼馴染がいるとか、そういったギャルゲー主人公の立場でもないし…。

一つ思い当たるとすれば、帰りに不良に絡まれてた女の子を助けたこと、くらい……

「て、しっかりと思い当たるフシあるじゃん！！ 意外とやるな俺！！」

そうか！ 髪長さからして、彼女である可能性は十分にありうる。と言うか、看病してくれそうな人は彼女くらいしかありえない。

彼女のことを思い出して行くと同時に、夕方の光景が思い出されていく。

慌てて自分の身体に手を置いた。恐らく、貫通したであろう場所をさすってみる。

「無い……………」

寝惚けた頭をフル回転させながら、自分の身体を探る。
恐らく、ざっくりと全身をくまなく貫通されたって記憶があるんだ
けど…穴、どころか、包帯や絆創膏すらも張られていない。まった
くの健康体があった。

「いや…………コレは、塞がった跡か…？」

触れる感触に、なんとなく違和感がある。

指でなぞって擦ってみれば、少しだけ痛い感覚が残るものの、あの
状況から考えれば異常が無さ過ぎた。

首を傾げて数秒間。思考に没頭していると、不意にドアの開く音が
聞こえた。僅かばかり、光がドアの向こうから漏れて、また閉まれ
ば闇に閉ざされる。こつこつ、と、歩く足音が数回。目の前のカー
テンの仕切りが、サアツ、と、開けられた。

「……………起きていたか。」

野太い声。

姿を現したのは、ガタイの良いおじさん、と、言って差し支えない
くらいの年齢の人だ。

半袖、ジーパン。そして袖無しワークスタイルベスト…ワークス
タイル、っていうのは袖が無いのが一般なんだろうか？

「……………。……傷は塞ぎきったか…。恐らく、大丈夫だろうが…
…今は安静にする事だ…。水分を取り易いスポーツ飲料を買ってき
た…病気では無いし、外傷も既に無い…勝手に飲ませてでも大丈
夫だろう……………」

こつ…と、ベッド脇の荷物棚の上に缶が置かれた。

話の流れ通り、置かれたのはスポーツ飲料だ。

そのおじさんは椅子が無い為か、壁にもたれかかって缶コーヒートのプルタブを開けた。

自分用を買ってきたんだろう。砂糖は入っていないブラックらしい。缶から見るに。

「え……ああ、えっと……父さん？ 一体俺に何が起きたのか教えてくれないか…？」

衝撃の新事実！！

実はこの野太い声の渋いおじさんは俺の父親だったのだ！！

……自分に自分で隠し事しといて「衝撃の新事実！！」とか心の中でやってるのって空しい。

ああ、と、ブラックを一口飲んで苦い顔をしてから頷いた。

記憶が正しければ、父さん苦いの苦手じゃなかったかな。なにしてんのん。

「……構わない。……どこまで、覚えている…？ どこまで、知っている…？」

この人は、なんとなく見ての通り口数が少ない。

いかつく、黙って座られて地獄の底から響くような声で何事かぽつぽつ呟かれれば、おっそろしい事をされた覚えが無くとも、少し関わり合いになりたくなくなることもあるだろう。

しかし家族として暮らしてきた俺、姉、母にしてみれば、心優しく頼れる父…といった感じだった。

いかつい外見をして、口数も少ないが、それが周囲を威嚇しているだけである。

「えっと…確か、俺は帰りに女の子を救って、一緒に不良から逃げたと思ったら影を使う異能使いに……倒された、か？」

ここで記憶は途切れている。

あんなサンシタ属性に殺されてゲームオーバーで今に至る…という事実はとても悔しいけど。

現実ってそんなモンだよな…とも思う。

あんなサンシタでも、異能使いとそうでないものではかなり差があるものなんだ。

「……………そうか。」

ふむ…と、頷いては、手元のコーヒーを一口。

苦い…………と、表情の微妙な変化で我慢して飲んでるのが分かる気がする。

…………だから、なんでそんなに我慢して飲んでるのん…？

「…………あの後、お前が庇っていた少女が異能に覚醒。光により影を退け、治癒異能によって死の縁に立つお前を蘇らせた。この病院に運ばれてから三日三晩…魔力を使い果たしては眠り、回復しては異能を注ぎ続ける…………と、いった献身的な看護が続けていた。」

えっ、ま、まじで…！？

一日も経ってないと思ってたけど、実際には三日も既に過ぎてた…！？

いや、そんなことは重要じゃない。三日三晩、そこに突っ伏してるであろう、恐らく千景ちゃんが、異能に目覚めて直ぐにそこまでし

てくれた……のか……!?

「……本来の医療をせずに、何故に異能に頼ったか……と、言えば……裏では、異能は通常の才能として認められているからだ。……治療の異能使いがいるのなら、現代医学に頼るよりも異能に頼った方が、生存率も上がる……。……俺が、異能に関することを知っているから、隠す必要も無いからな。」

異能は世間からは隠される存在である。

本当のところ、みんながみんな、覚醒したら使える力ではあるが、強さもまちまちでその力は肉体に縛られない。

幼児がメテオスウォームとかイオナズンとか使える可能性もある、ということだ。

異能による犯罪、なんていうのも、存在しているらしく……。……お偉いさんにしてみれば、正直みんなに覚醒して欲しくないものであるから、現実にはまったく知られないよう、今まで「異能とか(笑)」という態度を取っていたらしい。

聞いた話によると、物凄い魔力を持つ異能者が、認識齟齬の異能で全世界を覆っているから、一般人には知られない、という説もある。まあ、それが正しいとすると矛盾が生じたりもするんだけど……。要するに、異能は一般人に知られちゃいけない力なんだ、と覚えておけば問題ない。

「い、いや……俺がなんかすんげえ不思議そうな顔をしたのは、千景ちゃんがそこまでしてくれたのが不思議すぎて……。……」

千景ちゃんだよね……? と、指を指して尋ねた。
ああ、と、腕を組みながら頷く男。

「それは仕方ないだろう……ほr」

「っは……また気を失って……!!」

理由を知っているのか、口を開きかけた父さんの言葉が止まった。勢いよくぼっつさあ！と広がっていたホラーに出てきそうな髪が起き上がり、髪が割れてその後ろに隠れていた顔が姿を現した。

「……よ、よう、おはよう……？」

顔は少しやつれてはいたものの、結構な美人さんである彼女は、その顔で幻滅してしまうどころか、新しい一面を見れてらっきー、と思わせてしまうような気がした。

「……………」

徐々に、顔が歪んでいく。

目に涙が溜まって行くのがよく分かる。

がたんっ、と、立ち上がる音。一緒に、椅子が転がる音も。

え、俺何されるの……!？と、見上げる形となってしまった姿勢で、そのまま千景ちゃんへと視線を向けて…

「良かった……!! 治って、良かった……!!!!」

一瞬の出来事だった。

いきなり彼女の姿が一瞬で見えなくなったかと思うと、視界が彼女の肩越しになっていたのだ。

恐らく、要するに抱きつかれているんだろう。

……これが異能の、力……!!!!

「……………言っておくが、異能は使われていない。」

空気を読まないおっさんが、コーヒー片手に言った。

しかし、感極まった彼女はそんな言葉も聞こえていないんだろう。

そのまま、抱きついたままに泣き出した。

多分、嬉し泣きだ。蘇ったのが悲しいから泣いてます、って言われ
たらかなり落ち込む自信はある。

「良かった……本当に、良かった……。」

あ……あの……？

力一杯に抱きしめられている。

当然、柔らかい女の子な身体とか、しっかりと自分に押し付けられ
ているワケであるが、自分はそんなことをされた経験が一切、無い
のでそのまま固まってしまった。

これは背中に手を回して、「大丈夫だよ」なんて言いながら落ち着
かせるのがベストなんだろうか。

よく俺が読む小説でモテモテの男キャラが大体やったりするんだけ
ど。

「あ、えっと……ありがとう。一命を取り留めた。」

しかしフィクションはフィクションである。

「ただし、イケメンに限る」である。

思い上がって手を出そうものなら、こんな女の子であっても容赦無
い張り手が飛んでこないとも限らない！！

俺は抱きつかれるままに、お礼を述べるだけに留まった。

惜しいけどさ。俺は女の子と会話できるだけで幸せになれる人種なんだよ。

分かりやすく言えば「非モテ組」。

男にモテない非イケメンが女の子にモテるはずは無いわな……。

「う……ううん……。私の方こそ……私なんかを助けたばかりに……これで助けられなかったのなら、悔やんでも悔やみきれなくて……」

千景ちゃんは一度身体を引いて涙を拭った。

うううう……と、本当に嬉し涙で泣いてくれているのが良く分かる。

「そりゃ、な……千景ちゃんみたいなかわいい女の子が、あんな下衆にいいようにされるなんて我慢できるはずがねえよ。」

俺が教室で時間を潰していなかったら、千景ちゃんはどうなっていただろう……と思うと、とても背筋が寒くなる。

あんな不良が放し飼いにされてる高校だったとは……一年やってて気付かなかったなあ……。

「へっ……?! か、かわいい……ですか……?」

ぴよこん、と、身体を震わせて、少し顔を赤くしながらびっくりしている。

……なんか、変なコト言ったっけかな。

「もうちょっとかわいくなけりゃー、不良に絡まれるコトも無かっただろうけどなあ……そいやあ、あの影使いの不良はどうしたんだ……?」

もう！ と、ちょっとだけ怒ったようにふくれた顔をこっちに向けて。そして父に尋ねるように言葉を投げかけた仕草に、慌てて振り返り、「い、いたんですか！？」と、びっくりしていた。

「……………悪かった。」

父は、なんか謝った。

まあ…………男に抱きついて泣き崩れるなんて、あんまり見られたいシーンじゃないだろうし…。

「…………それで…………影使いの不良…………だったな。」

話を戻した。コーヒーを一口飲んでから、また低い声で答える。

「…………俺たちが、追い詰めて打ち倒しておいた。…………異能を用いて一般人を攻撃した…………明確な悪意のある行動…………の、場合…………殺すことが、法律で定められている。…………いろいろ、難しいところではあるがな…………。」

法律…………というのは、学校の授業でも習うような一般の法律ではないだろう。

恐らく…………異能者のみの集団が作った決まり。いろいろと難しいところ、と言うのは、冤罪の犠牲とか。

確かにこれだけの法律じゃー、簡単に罪着せられそうだしな。

異能者が異能者を攻撃するときに、一般人を盾にしたりとか。

一般人が何らかの方法で異能者が攻撃できないのを知って、好き放題にボコるとか。

まあともかく。学校に行ってもあの不良は居ないワケだ。

でもそれ以外の不良とか、厄介かもしれんね。うまく毎日逃げ切れつかねえ……。

「ンじゃあ…後は、今回みたいな怪我をせずに不良から逃げおおせるワケだ。なんとか、安心ではあるな。千景ちゃん。」

「……え……ええ。そう…ですね……。」

ん…？　なんか、返事が元気ないけど……からかったの、まだ怒ってんのかな…？

「ああ……お前は知らないか……。」

ぴちゃんぴちゃん、と、残り少なくなったブラックコーヒーを弄びながら父が言う。

……何？　おかわり？

「……光原千景は転校する事になっている……。」

……え？

低い声でゆっくりと告げられた言葉は、しっかりと自分の思考回路を停止させてくれた。

第四話 今度こそ俺が異能覚醒（前書き）

誰かがお気に入りに入れてくれたようです。

これからは誰かに見られていることを意識し、がんばって執筆したく思います。

と、いいつつさっそく更新日がこのていたらく！！！！！！

第四話 今度こそ俺が異能覚醒

えーと……と、暫く自分の中の時間が止まった。

千景ちゃんが転校……？ 不良にからまれただけで、実際には何もされていないはずだが……。

「ま、まさか、俺がやられたあと口じゃー言えないようなあんなことやこんなことをされて学校にいられなくなったとか……？！」

三日も寝込んでいたのである。不良が手を出さないと言い切れない。

十分に……ありえ……！！

「ち、違います！！」

妄想しかけた思考は、なんとか千景ちゃんにより引き戻された。どうやら、不良たちになんやかやはされていなかったみたいだ。良かった。

「うん……あの後、学校にも行ってませんし……。不良とは顔も合わせません。」

うん……？ 今日も含めて、確か平日だった気がするんだけど……。

「忘れたか………彼女は、三日三晩………休むことなく異能を使い続けていた……。」

「あ、そ、それは……。」

少し前にも聞いた事実。

ああ、そうだった。彼女は自分の為に集中して看病をしてくれていたのだった。

「三日三晩……飯を食うことも忘れてな……。」

「ちょっ、ソレは、大丈夫かよ?!」

頬がこけたり疲れた表情だったりしたのは、コレが原因なんだろう。すぐにでも何か食べさせないと……。現代っ子に断食とか、厳しいだろうし……。

「……おにぎりを、今日の昼に買い溜めておいた。……お前も腹が減っただろう……一緒に食べるというい」

そう言うと、ベッド横の棚からビニール袋を取り出す。

ぼこぼこ見た目が変形しているのを見れば、おにぎりがいくつか入っているのがわかる。

「あのさ……ほんとにありがとう。千景ちゃん。父さんも。」

おにぎりを見せられると、なんだかおなががすいてきた。ささっと食べよう。

ほら、好きな選んで! と、ビニール袋を千景ちゃんに差し出してみれば、少し遠慮する素振りを見せたものの、流石に空腹度合いは小食じゃ誤魔化しきれなかったんだろう。それじゃ、一つ……と、コンビニのおにぎりを一つつまみ出した。

……いや、それはともかく。もうちょい、大事な話があったはず。

「って、話がそれた。なんで千景ちゃんが転校するんだ……? 別にトラウマも何もねえだろうし、転校させられるンならむしろ千

景ちゃんを襲ってた不良だろ…？」

それでも、女の子に絡んだだけで転校、というのは罰としては重いかとは思うが……。

自分の認識が甘いのか……？

「ああ……不良はあまり関係が無い……。関係があるとすれば……彼女自身について、……だ。」

千景ちゃん自身……？

ペーリペーリと慎重にビニールを剥がす千景ちゃんを見つめる。

「もしかして、ものすごくトラウマになっちゃった……？」

「あ、いえ……あまあ……るおん君が居るなら、私は大丈夫……なのですが……。」

俺の心にずしーん！！ と、キューピッドの矢、どころかキューピッドの槍が突き刺さった。

く……く……！！ こんなに女の子に想われる事なんて今までにあっただろうか……！！ 無いな……！！

たまたま自分が助けたから、とはいえこう言ってもらえる嬉しいし……ちよつとばかり勘違いもしてしまいかもしれない。

「彼女自身が問題……と言うのは、トラウマなどという事ではない……。彼女が、異能に目覚めてしまった……と言うのが、問題なのだ……。」

「異能覚醒……？」

そう言えば、覚醒した光と治癒の異能で自分を救ってくれたんだっただけな。

でも、それが転校しなきゃいけない理由になるか……？

「彼女は異能について……三日前に知ったばかりの素人だ……。通常……何かの拍子で異能に目覚めた人を確認された場合……専門の機関に入れられ、異能について学ばされる……。」

なるほど……。

千景ちゃんは異能について素人だから、いろいろと異能を使うことについての決まりごと、なんてわかんないだろう。
だから、専門の機関に入れられて……専門の機関……？

「要するに……異能を学ぶ為の、学校に転校してもらう……。」
「あー……なるほど。そういうワケか……。」

理由は大体、分かった。ふう……と、ため息をついてから「なるほどなー」と、どこかの対シヤドウ殲滅兵器のように呟く。

「安心しろ……学校の設備はかなり良い方だ……。不良に追いかけるような毎日……よりは、安定した学校生活を送れるだろう……。」

「ああ……。」

「お前の治療の為に……転入を延ばし延ばしとしていたが……もう大丈夫だな……。これ以上、延ばす必要も無いだろう……準備の期間は何日くらい必要だ……？」

もう既に、いつから学校に行けるか、という話し合いを始めているみたいだった。

千景ちゃんは、こちらをちらりと見て。「仕方ない……よね」と、小さく言って笑いかけた。

「大体、一週間くらいで荷物は纏められるかと思います。」

「そうか……では、その日付けで手続きをしておく……。安心しろ……あっちの生徒も、皆いい奴ばかりだ……。」

安心させるよう、何度か頷きながら言い聞かせるように父さんが呟く。

千景ちゃんが転校してしまう……。

まあ、決まりなのだから仕方ないと言えば仕方ないのではあるんだろうが……なんか、なあ……。

何と言うか……な……。

「親御さん達には………本当の事を話す……。………どんな反応が返ってくるか分からないだろうが……」

「あ、はい。お願いします……。私だけでは説得できないと思うので……。」

自分をプチ蚊帳の外にしつつ、会話が進んで行く。

何故だか俺は、とてもこの少女と別れてしまうのが嫌だと思ってしまった。

その異能養成学校は「いいやつばかりだ」とのことなので、不良に絡まれる心配は少ないだろうが……もし、千景ちゃんに良い友達が出来て、その学校生活が充実したものとなったのなら、転校前の学校の人物なんて忘れてしまうんじゃないだろうか、と。

最後に数日会っただけの俺なんかのことは、尚更。

だから

「な、なあ、俺もその学校に入ること、って出来ないのか……?」

小学生低学年程度までにしか許されないような駄々を捏ねた。
はつきり言って駄目モトだ。俺はまだ、異能に覚醒してないし。

一応、心の奥底には存在していて、魔力も膨大にある…らしいので
はあるが。

「覚醒する」というきっかけが発生していないので何も起きないの
だ。

「ああ……そうだな………良い機会だから、お前も転校することにな
っている。」

……え？

「ゆくゆくは覚醒する身だ………学生のうちに学んでおいた方が無駄
が無い……。」

「いやでも、俺、聞いたってナンだけど、異能にまだ目覚めてない
……けど……？」

提案してみたものの、いざ自分も、となると…自分でも分かっていた
問題について、目が行ってしまう。

「魔力があることは確かだ………だから、そのうち覚醒する。……
そのうち覚醒するのであれば問題ない……。」

「なるほど…覚醒しなかったとしても、中途半端に俺は既に知って
るからな…しっかり教育されておいた方がいいのは確かかってコトか
……？」

そうだと、頷くわが父。

「て…いうことは………まだ、一緒………てこと、ですよね……？」

はにかむように千景ちゃんが笑う。

えー、一緒なのー？　みたいな反応をされていないので、嫌がってはいないはず。

むしろちよつとばかり嬉しそうに見えるのは、俺がそういう風に見て欲しい、という願望による錯覚なんだろうか。

いや、知らない人ばかりの所へ突然投げ出されるよりも、一人でも知り合いが居た方が安心できるだろうし。きっとそういう理由で嬉しいんだろう…と、思う。たぶん。

「……とはいえ、異能が無い状態である学校の学校生活を送るのは…かなり骨が折れるだろう……。」

「大変なのか…？　んー…まあ、異能の集中の仕方、とか魔力向上ーとか、あったらそりゃー、真似できネェけど…。」

中途半端に異能についての決まりごとを知っている自分としても、その学校についてはあまり知らない。

全く異能に目覚めていないから、行く必要が無いと思ってた場所だ。高校に進学する時も、こんな学校の事を調べるよりもまず、普通科の高校のレベルを調べたりしてた。

「ああ………そうだな。あちらの学校では、異能が使用不能であれば、点数は強制的にゼロになる…。総合得点で赤点になってしまわないためには……それ以外のところで、苦勞をしなければならなくなる……。」

「そりゃあ………異能関係以外でかなり頑張らなきゃならねえって事になるのかな…。」

それだけではないがな……と、言いながら頷く父さん。

千景ちゃんに忘れられたくない一心で突発的に「転校したい」と宣

言してしまったが……大丈夫なんだろうか…。

「だから……手は打ってある。」

「…手？」

タイミングよく、どたどたと廊下で音がした。

来たか…と、父さんが顔を上げて呟く。

もうかなり深夜に差し掛かっている時間帯だが、大丈夫なんだろうか。

足音はだんだんと大きくなり、自分の部屋の前で足を止めた。

今更に気付いたが、この部屋で入院している人は、俺を除いて誰もいないみたいだ。

まあ、異能を隠すために一人で使える部屋を確保したんだろう。ベッドは設置されているみたいだが、患者さんは居ない。

「りゅうちゃん、持ってきたよ!!！」

ツバーン!! と、ドアが開かれる。

そこには、多く見積もっても大学生ほどにしか見えないくらいの女性、扉を掌で押した体勢で、にっこにこな笑顔を巻きながら仁王立ちしていた。

白シャツにネクタイ。黒スカートに黒タイツ。羽織るように白衣を着た、ロングストレートの女性。

「りゅうちゃん」

「のうあ?!！」

その女性は「持ってきた」と言っているものをこちらに放り投げて、父さんへと一直線にくつつきに行く。

別に父さんの浮気、というワケでもなく。この女性はれっきとした

母さんである。

一瞬見えた、「持ってきたもの」が壊れ物に見えたから咄嗟の判断で柔らかく受け止めたけど……正解だった。手の中にあるアイテムは、クリスタルのように縦に長い結晶みたいで、よく見れば結晶の中に黒く渦巻く何かが見えた。

「気をつけろよ！ 割れるだろ！？」

「ねー、りゅーちゃん、ちゃんと加工してきたよ！ ちょうとつきゅうで！」

「ああ……ご苦労様。頑張ったな……。」

「わー……。」

こっちの文句もお構い無しにいちやつき始めるバカップル……という名の両親。

母さんはべったりと父さんの胸板に擦り寄り、父さんは「よしよし」と言いながら頭を抱きこみ受け入れている。

母さんの外見としては、十分に若々しく見られることも多々無いコトも無いが。流石にデレデレ甘えるような歳には見えないもので。ないすばでーなお姉さんが子供のように甘える姿は、見慣れない人にとっては唾然としてしまうモノなのだろう。現に千景ちゃんが固まっている。

「んー♪ んー♪」

母さんは「あんしんするばしょー」と呟きながら父さんの胸に顔を埋めている。

ちらっと見えた表情から察するに、とても幸せそうである。声かけて邪魔したら凄い勢いで睨まれそうだな。

「あの……るおん君のお姉さん……?」

「いや、うちの母さんだけど。」

「へ……?! 凄……い……若……い……す……ね……!……」

隠れてひそひそしなければならぬ……というワケでもないんだけど。自然とそうなった。

自分がベッドから立ってウロウロ出来る身体なら、この場から離れたり逃げたり隠れたり、何らかの対策を取ったんだけど。

千景ちゃんはこの状況をこちらに丸投げせずに、一緒に耐えてくれるみたいだ。なんて優しいんだ。

興味深げに「へー……」とか両親の方を食い入るように見つめてくれるけど、俺は一緒に耐えてくれてるだけで感謝の気持ちで一杯だ。

「ふにゅん……ふにゅん?」

妙な鳴き声を上げている母さんと眼が合った。

たぶん……俺と千景ちゃんによく気が付いた、といったところだろう。

俺に向かってクリスタルを投げてよこしたのは、たぶん、無意識の行動だと思う。

「ふにゅん……」

「って!! こっちに気付いたンならもういいだろ?! さっさと話進めろよ!!」

こちらに気付いたが、現実逃避するかの如く再度胸に埋もれてく母さん呼び止める。

普段なら別に、ほっという寝るところだけど。三日三晩寝たから眠くないし。いつまでも無駄な話に千景ちゃんを付き合わせてしまう

のも悪い。

「にゅ〜……………」

「にゅーじゃネエよ!? コレを持ってきて、ナンか父さんが「これこれこうですからこうなんですよ〜」つつって説明したりイベント進めたりするつもりだったんだろ!? 一向に話が進まんのだけど!〜!」

つづけざまで悪いがもう一度叫ぶ。

自分一人なら、もう諦めて寝てるんだろうけど。千景ちゃんがいるし、そういうワケにもいかん。

「……………いじわるー。」

こちらに向いてぷう、と、頬を膨らませる母さん。子供か。何歳だ。

「……………いつものことだ……………気にするな……………」

頬を膨らませた母の肩を抱いて、自分の身に引き寄せる父。

「いつものことだけど!〜! せめてさっさとこの「対策」とやらのアイテムの説明をしてこの部屋から出てってくれよ!〜!」

これはバシっと言わないと無限にループする危険性があるので早めに対処。

二人もさっさと説明を終わらせて裏でちゅっちゅっちゅしたいはずだ、という両親を想っての言葉である。だからさっさと説明終わらせて去ってくれ。

「……………そうだな、説明しよう。」

正直に肯定されるのも、なんだかアレだ。

「…………そのクリスタルは……人から取れる異能の結晶だ。人から抜き取った異能を、結晶に閉じ込め……保存してある……。」

「人から抜き取った……って、まさかアイツの?!」

俺はそのクリスタルをマジマジと見た。

確かに、透明な石の中で畝っているのは真っ黒な力。

闇か、影かは分からないが……ヤツから抽出したんなら、やっぱ影なんだろうかね?

「…………異能者としての彼は殺した……その異能が持ち主に帰らぬ限り……異能者として過ごした記憶は消えている筈だ。」

「ん? 異能者としての……?」

「…………今は、普通の高校生として……生活している。」

…………なるほど。

つまり、結果的にあのデブさんは殺されていない、と、いうワケだ。

俺としては第二第三の犠牲者が出ないうちに、駆逐しておいて欲しかったところではあるけど。

少し、自分の父親が人殺しじゃなくて、ほっとした、というコトもある。

「…………そして、その結晶は……お手軽に、人に異能を追加する力を持っている……。」

ナンか、さらっと凄いアイテムな事言われた気がするんだけど……要するに異能版技マシン……?

「…………回数制限のある、ひでんマシンも…この世のどこかに存在する…。」

なんか途中から説明がポケモンに変換された気がするけど。
まあ、一部の人には分かりやすいんじゃないだろうか。

「え…？　でもそれ…だとしたら、異能者同士の能力狩り…のようなもの、起きそうですね。」

横で大人しく聞いていた千景ちゃんが口を開いた。

それもそうだ。簡単にこういったアイテムが異能者から作り出せるとするのなら、異能で力を求める狂人のような人が現れることも考えられる。

異能者のニュースには詳しくないから、そういう事態になっているのが多いのか少ないのかすらわかんねえんだけどね。俺は。

「それはないよー」

父さんに抱きついたらますますりすりしていた母が顔を、父の腹部に引っ付けながらこちらに顔を向けた。

ちゃんとこっちの話、聞いてたんスね。いないモンとして話を進めようかと思ってたよ。

「異能の数が増える、って言っても、魔力が増えるわけじゃないからー。例えば、火100%の人が、雷のクリスタルで異能を追加するとすると、火90%、雷10%って感じに、若干火の扱いが下手になって、雷が少し使えるようになるだけなんだよー。」

ふーん…………うん…？　分かったような、わかんねえような。

「つまり…魔力100があるとする…RPGみたいに、魔力100を火と雷で使い分けることができないんだよ。人の素質によって、割り振り方も違ってくるけど。この場合は魔力100あるうちの、90を火に、10を雷に使えるようになる…っていうことだね。」

つまり、魔力は身体の中で、属性に分けて持っている、って…いうことか。

「つまり…調子に乗って沢山属性を追加して行くと…」

「何の異能も、発動すらしない程度に弱くなっちゃう…っていうことだね。」

物知りだな…と、父さんが母さんを撫でている。母さんはふみゃー…と鳴いた。

質問は特に無いから、母さんが答えられない状態でも大丈夫か…。

「……つまり、そいつで異能を習得してみるんだ。異能を感じることができたのなら…覚醒も早いだろう……。」

まだ知らない自分の属性に、影が加わる…と。

別に自分は、超絶強くなりたいわけでもないから、手っ取り早い方法、って言うのならそれもいいだろう、と思う。

「……特に、反対も無さそうだな…。それでは……異能の手に入れ方を説明する……。」

父さんは俺の表情を見て、「異能手に入れられんならどうでもいい」という心の声を読み取った。

凄いな。俺はまだまだ読み取れない、ってーのに。

……で、父さんから一通り、魔力の込め方についてれくちゃーを受けた。

この魔力の込め方、ってー言うのがとてつもなく地味。かつ、曖昧。こうして、こうして、そして気合だ！！で、魔力って籠るらしいね。

どう考えても説明の仕方がアレだろ……と、思ったけど。

父さんの胸の中でうとうとし始めた母さんと、ちよつと居てもいいんだか……と、困り始めた千景ちゃんを横目に。軽く影のクリスタルに手を翳して見る。

これで、できなかつたらまた明日、ってコトで。

今日の所は一段落させてみんなに休んでもらおう。俺以外、みんなずっと起きてたんだろうし。

俺は体内に意識を沈め、精神を込める。

自分の中の光を見つけ、それを開放することにより、やっと魔力になるのだそうである。

魔力を込める場合は、その光を込める物体へと誘導させて……

と、自分の中の魔力を影のクリスタルに触れさせた瞬間。

自分の視界が白く染まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4755m/>

異能学生2年生

2011年10月7日07時15分発行